

# 時代の変革期に道徳教育に求められるもの

公益財団法人モラロジー道徳教育財団 顧問 北川 治男

国民生活は今、数年前には予想もできなかつた閉塞感と先の見通せない不安感に覆われています。いまだに新型コロナウイルス感染症終息のめどが立たず、経済をはじめとする諸活動や健康にとつて厳しい状況が続いています。その中で専制的覇権主義国家による他国への軍事侵攻という、

今世紀にあつては考えられない暴挙が勃発し、世界平和に暗雲が立ち込め、グローバルな経済の混乱が危惧されています。人類は今、時代を画する大きな変革期を迎えていたとする論調も現実味を帯びてきました。

ちに「生きる力」を培うための工夫努力が積み重ねられています。この目的・目標は、学校教育とりわけ道徳教育の本質であり、時代を超えて不变であるばかりでなく、特に今日の困難な時代を生き抜く子どもたちにとって、不可欠の課題になつてきています。

今、私たちにとつて必要なことは、子どもたちが生きることの難しいこの時代を生き抜く力とは何かを、真剣に問い合わせてみるとことではないでしょうか。本誌一六三号では、「生きる力」の基本として、「もちこたえる力」と「つながる力」について述べましたが、いま改めて「もちこたえる力」とは何か、それをどのように育てるのかについて共に考え

てみたいと思います。

西欧近代の民主主義の根幹をなす個人主義は、ともすれば自己中心主義に流れて人々の心の絆を断ち切り、孤独と孤立に追いやりやすいことを、コロナ禍を通じて私たちは経験しています。私たちは個々人がバラバラに生きているのではなく、自己の存在を支える心のヨットハーバーがあるはずです。たとえば私たちは皆、親・祖先から受け継がれてきた家族があり、国民として共通の歴史や精神的伝統を共有しています。閉塞感と不安感の漂う今日こそ、自己的生存を支える基盤がどこにあるかを見直し、先人と歴史の恩恵に感謝し、そこに肚を据えて生きる生き方にこそ、



北川 治男氏

## いま求められる 「生きる力」とは



迷いや不安の中で揺らぎながらも、さまざま人生の困難を乗り越えて生き抜く「もちこたえる力」、言い換えれば「レジリエンス（復元力）」の源泉があるといえるのではないしょうか。

## レジリエンス教育が目指すもの

長らく静岡県磐田市の教育委員を勤められた杉本憲司氏が、最近、同県で「レジリエンス教育」が具体的に小、中、高等学校で実施されているとの情報を寄せて下さいました（『静岡新聞』令和四年三月二十三日版）。そこには「困難から立ち直る力」を養い、「心のしなやかさ」を育む、静岡大学教育学部の小林朋子教授の教育実践が紹介されていました。同教授によれば、レジリエンス教育とは「何にも影響を受けない鋼の心」を目指し

すのではなく、「逆境に陥つてもしなやかに立ち上がり、元に戻ろうとする力」を養うことであるといいます。思春期の成長過程にあつて自己に批判的で否定的思考に陥りやすく、生きづらさを感じることが多い子どもたちに、「自分との向き合い方」「人とのコミュニケーション」「ストレスへの具体的対処法」を体感できる場づくりに工夫を凝らしています。

## 道徳的努力がはらむ矛盾

我が国では、二〇一一年の東日本大震災で多くの人が体験した PTSD（心的外傷後ストレス障害）からの心の復興の必要から注目されるようになった「レジリエッスン(resilience)」は、世界的に想定外の事態が起こり、先の見えない不安の時代を生きる私たちにこそ要請される「生きる力」というべきでしょう。そして子どもたちには、困難な状況下でも逞しく生き抜く復元力・回復力を高める可能性があるとの信念に立ち、学校教育を通して早くから養い育てたいものです。

これに関連して、最近、道徳教育にとって興味深い洞察に接しました。（ジョアン・ハリファックス著・海野桂訳『Compassion コンパッション』英治出版）

それは美德とされる「利他性」「共感」「誠実」「敬意」「関与」という資質には二面性があるというのです。これらの資質は切り立った崖のような状況に置かれていて、一歩足を踏み外すとかえって苦しみの泥沼に滑り落ちてしまうことがある。たとえば利他性は合おうとする「思いやり」こそ、いま求められる「復元力」のある生きる力」と言えるのではないか。

